

## 彦四郎の涙石



平家全盛の頃この草深い奥畑職城の山里に僅かな供人を連れた見慣れない人たちがやってきました。その頭は彦四郎と呼ばれていました。しかし、この人たちは只の人ではないようでした。都言葉を使い、又衣服もきらびやかで、万事派手に振舞いました。しばらくの間に、立派な住まいができ、次々と供人の数も増えてきました。何でも都のさる高貴な方のご子息ですが、事情があつて都に住むことは都合が悪く、平家と最も親交のある巖島の神主、佐伯景弘の庇護のもとに巖島に程遠からぬ奥畑の山里に隠れ住むようになったと言う事でありました。山里とはいえ、時には鼓の音や、笛の音も聞かれました。都のしきたりに似た堂上堂下の住まいの区別もできました。局の名も聞かれます、舎人の住まいもできました。何々の庄司といわれる武士の名も聞こえます。

しかし、おごる平氏は久しからずとか、全盛を極めた平家の一族も清盛の死を境にして、次第に衰えて参りました。一の谷に、屋島に、そして壇ノ浦の戦いは、

再起をすることもできない一族総討ち死にの悲劇でありました。この悲報は、山深い奥畑職城の一党のもとにも次々と知らされました。頼みに思う巖島の神主も、どうやら今では源氏方であるとか、いやもう既に平家の残党は探し出されて打ち首になつていたりとか。その中に源氏の監軍・梶原景時による残党狩りは始まつておりました。まず、石道、次いで串山城もあえなく落城し、平家水軍の搦手組(梶毛谷)を掃蕩して石内と奥畑の境榎ヶ尾まで攻め上りました。ここで源氏の軍は大休止をして源平両軍の戦死者の冥福を祈り、供養をいたしました。一の谷・敦盛塚のあるのもこの近くです。

幟城にある平家の一党は、戦々恐々、生きた心地はありません。まず戦うには地の利を考えねばなりません。それには上奥畑の陣ヶ丘に陣を敷くしかありません。永年住み慣れた職城の地を、今日を限りに見捨てねばなりません。一族を引き連れて西の方をさして落ちていきます。さすが気丈な平家の武士彦四郎も、これが最後かと、幟城の住まいの見えなくなる所まで来て振り返り、悲しみの涙を止めることができません。こらえきれずに泣き崩れます。このところが彦四郎の涙石のある所です。

『沼田風土記』から要約抜粋

奥畑に通うバスの終点の近く、現在は新しい道路に置きかえられているが、旧道部分に「彦四郎の涙石」と呼ばれる岩が、わずかにその根元の方が残っていた。道路工事で削り取られて、小さくなつた岩には、「涙」と称された山水の滴りはすでに見られなく、その岩も、今では完全に除去されて、平成 20 年頃には姿を消した。この岩の下谷川で、かつて藤廣繁吾氏(故人)が「釣り堀彦四郎」を経営していた。

「沼田歴史散歩」

平成 28 年 11 月吉日発行

沼田歴史散歩の会 より